

論文内容要旨

論文題目

臨床看護職者の針刺し反復に影響するパーソンアプローチの要因

教育・研究領域：生涯生活支援看護学

氏名：久保典子

【内容要旨】

看護職者は針刺しのリスクが最も高く、針刺し反復者が一定数存在する。本研究は針刺し反復に影響するパーソンアプローチの要因について、全国調査によって初めて実証的検証を行った。看護職者 21,890 名中、3,114 名（14.2%）が針刺し反復者であり、臨床経験年数 10 年以上は 10 年未満と比較し、針刺し反復のオッズ比が 2.798 であった。臨床経験年数 10 年以上の看護職者の針刺し反復に影響する要因として「男性」（OR 1.531）、「看護基礎教育の安全教育を受けていないこと」（OR 1.346）、「リキャップを行うこと」（OR 1.117）、「針捨て容器の不持参」（OR 1.086）、「業務は常に時間に追われていると認識すること」（OR 1.063）、「採血時に分注を行うこと」（OR 1.058）、エラータイプ尺度の「業務ミス」の経験（OR 1.051）、楽観性「気楽さ」（OR .984）が抽出された。病院内で針刺し防止策について対応することに加えベテランが油断しないための警鐘を行うことや個人がルールを遵守することを強化する必要性が見出された。

平成 28 年 7 月 28 日

山形大学大学院医学系研究科長 殿

学位論文審査結果報告書

申請者氏名： 久保 典子

論文題名： 臨床看護職者の針刺し反復に影響するパーソンアプローチの要因

審査委員：主審査委員 布施 淳子



副審査委員 小林 淳子



副審査委員 森鍵 祐子



審査終了日：平成 28 年 7 月 27 日

【 論 文 審 査 結 果 要 旨 】

医療職者のなかで看護職者は針刺しのリスクが最も高い。これまで、ヒューマンエラーの観点から技術工学的側面からの対策や職員への針刺し防止教育が実施され、各病院でも針刺し防止対策が進められてきた。このように組織的対策が全国的に実施されているにもかかわらず、針刺し反復者が一定数存在する。これらの課題を踏まえ、本論文はヒューマンエラーの事故防止対策のうち「パーソンアプローチ」に着目し、全国の病院を対象に、看護職者の針刺し反復に影響する「パーソンアプローチ」の要因について、一般病床数が 300 床以上の病院を対象に悉皆調査による実証的検証を行った研究である。

1 次調査を実施後、2 次調査に協力が得られた施設の一般病棟と外来勤務の看護職者 21,890 名を対象に、針刺し反復の有無を従属変数、パーソンアプローチの変数を独立変数として多重ロジスティック回帰分析を実施した。臨床経験年数 10 年以上であることが針刺し反復に最も大きな影響要因であることが明らかとなったため、臨床経験年数 10 年以上の看護職者 11,459 名を対象に再度多重ロジスティック回帰分析を実施した。

結果として以下のことが明らかになった。看護職者 21,890 名中、3,114 名 (14.2%) が針刺し反復者であった。また臨床経験年数 10 年以上は 10 年未満と比較し、針刺し反復のオッズ比が 2.798 であった。その影響要因として以下のことが示された。要因は「男性」(OR 1.531) で性差があった。「看護基礎教育の安全教育を受けていないこと」(OR 1.346) で看護基礎教育が有効であることが明らかとなった。

「リキャップを行うこと」(OR 1.117)、「針捨て容器の不持参」(OR 1.086) で、リキャップを行うことと針捨て容器の不持参は針刺し反復につながる事が明らかになった。「業務は常に時間に追われていると認識する程度」(OR 1.063) で、時間に追われているという認識は針刺し反復を誘発することが示唆された。「採血時に分注を行うこと」(OR 1.058) で、採血時の分注は針刺し反復につながる事が明らかになった。エラータイプ尺度の「業務ミス」の経験(OR 1.051)で、業務上のミスを起こすエラーの傾向は、針刺し反復につながる事が示唆された。

本論文は新知見が得られており学術上価値のある研究である。よって、看護学博士論文として相応しく、審査基準を満たしていると判断した。